

# 現代日本語のヴォイスの非対称性について

## －「-aru」と韓国語「-jida (지다)」の対照を例に－

金谷由美子(同志社大学)

### 1. はじめに

本発表は、統語的にも語彙的にも平行する韓国語との対照を通じて、日本語を単独で見ているときには気がつきにくい現代日本語のヴォイスの非対称性について論じるものである。野田(1990)は日本語のラレルによる受動化とサセルによる使役化が「対称的(symmetrical)」であるとしたが、日本語は使役化と他動化が未分化である反面、自動化と受動化は分かかれており、双方向に未分化な韓国語と比較すると、対称的とは言えないのではないかというのが本発表の主旨である。その根拠として、まず、第2節では、日本語では有対自動詞(早津1987)<sup>1</sup>に残る「自発」「可能」「受動」の意味が、韓国語では語彙だけでなく接辞「-jida」により生産的に表出されていることを見る。有対動詞の自他の分化は双方向であるため対称的に見える日本語も、生産的な形式においては「自発」接辞を失い、「受動/能動」の対立へと移行しつつあり(柴谷2000)、「自発/能動」が対立する韓国語(鄭2004)と比べると、「自発」領域の欠落が明確になる。第3節では、漢語接辞のヴォイス体系の変化において、日本語は自動化接辞が欠けていたため双方向に分化できず(永澤2007)、日韓で大きく漢語ヴォイスにズレが生じるようになったことを挙げる(金谷2018)。第4節では、日本語では「使役余剰」(定延2000)のみが観察されるが、韓国語では「使役余剰」以上に「二重被動」が目立ち、双方向に「余剰」が存在することを指摘し、まとめとする。尚、本発表では、「自発」を「ある動作や事象の生起が、有情の動作主や経験者にとって非意図的または完全にはコントロールが効かないこと、あるいは、ある変化が、変化主体にとって、何らかの外部の影響が存在する場合でも、外部から一方的に力が加えられて生起するのではないこと」を表すヴォイスであると暫定的に定義する。

### 2. 現代標準日本語には、生産的な「自発」接辞がないが、韓国語には jida<sup>2</sup> (지다) がある。

韓国語も膠着言語であり、動詞語彙のヴォイスは語幹に接辞(-i, -hi, -ri, -ki, -u, -gu, -chu, -ji等)を接続させ自他の分化が形成され、漢語動詞のヴォイス接辞(hada, doeda, sikida等)や分析的なヴォイス形態も接辞(補助用言)によって形成される点で日本語と類似の体系を持つ。有対動詞は、個別には異なりがあっても双方向に自他の分化が進み、全体として日本語と平行的であると考え。意味的にも、韓国語の有対自動詞や「被動」系の接辞は、「自発」「可能」「受身」にまたがる点で日本語の有対自動詞や古典語ラル等と共通する。ところが、生産的な「自発」接辞に関しては日韓でかなり事情が異なる。Ahn&Foong(2017)の通時的研究によれば、韓国語の「自発」接辞「-jida」は、15世紀の「tida(落ちる)」が語源とされ、動詞に接続し動詞連続体として変化結果を表すようになり文法化が進んだ(15C)。次第に完了相以外にも使用されるようになると、変化の始動部分や過程を表すようになり(17C)、その結果、受身文でも使用されるようになった(18C)。そして、20世紀では、否定文を中心に可能を表す形式になるとともに、受身文の接辞としても多用され現在に至り、ますます生産性を高めている(但し、受身の解釈はその事象が人為的な外部からの影響によってのみ生起するという条件を満たすときだけに成立し、基本的には「自発」接辞である)。一方、日本語では「自発」接辞としてのラレルは「思い出される」「考えられる」等の限られた思考動詞に接続する以外の使用は廃れ、現代語で「自発」を表出しようとすると、一部の可能形や「～てしまう」等の形式、副詞(うっかり、いつのまにか、つい等)を用いて迂言的に表現することになる(洪谷2006)。つまり、無対他動詞や無対自動詞に「自発」的意味を付加する術が限られていることになる。「門[扉]이 NM 안 NEG 열어져 [열 [開ける] 語幹+linker+ji [jida] 語幹+linker)」は、日本語でも有対自動詞語彙を使用して「扉が開かない」と言えるが、自他交替領域ではない無対他動詞の場合、「靴のサイズが小さくて) 안 NEG 신어져 [신 [履く] 語幹+linker+ji [jida] 語幹+linker)」を通常の可能形「履けない」で訳したのでは、「-jida」が表す自発的可能否定の意味と

<sup>1</sup> もともとは有対だった自動詞でも「座る」等、意味的变化から、所謂非能格自動詞になったものは、早津(1987)同様、有対自動詞には含めない。

<sup>2</sup> ハングル文字のアルファベットについて、本発表では韓国文化観光部2000年式を採用する。紙面の都合上、すべてをアルファベット表記にはしない。

<sup>3</sup> 20世紀に入り、欧文翻訳、そして直接的には日本語のニョット受身文の影響により韓国語でも所謂受動文が増加したことがしばしば指摘されている。

は微妙に異なる<sup>4</sup>。表1は、日韓の「自発」系の意味領域を担う形式の一部<sup>5</sup>を対照させたものである<sup>6</sup>。「-aru」<sup>7</sup>を「-jida」の比較対象として取り上げたのは、「つかまる」のように、多義的で動作主を背景に残す用例が見つかることもさることながら「-jida」以外の韓国語の「被動(自動化)接辞が「使動(他動化)接辞と共用<sup>8</sup>であるのに対して「-jida」は自動化方向にしか語彙を導かない点で「-aru」に似ているからである。対応が無い部分を網掛で示した。

表1 日本語ラレル・日本語自動詞(-aru系)・韓国語の自動詞(-i系)・生産的な接辞 jida の意味役割対照

	ラレル	日本語 有対自動詞 -aru	韓国語有対自動詞 -i系 (-i, -hi, -ri, -ki)	~지다 jida
語彙としての使用について [説明]	慣用的に語彙化したものはある 例: 振られる, つられる, 駆られる	自動詞の語形成の一部を担う。古くから存在し, 明治期まで生産性があった。	他動化と自動化の双方向に使用される接辞である点で日本語の動詞の自他分化の語形成における「-e」と類似。	自動詞の語形成の一部を担う。 例: 깨지다[kkaejida: kkae 割る 語幹+jida] → 「割れる」
①自発(狭義)	(~が~と)感じられる。			느껴지다[Neukky eo jida: neukki 感じる 語幹+linker +jida] → 「感じられる」
②受身関係	放火犯がつかまえられた/真実が検察によって明らかになった。	放火犯がつかまった	放火犯이 NOM 잡혔다[jap hy eotda: jap つかむ 語幹+hi 被動接辞+linker 過去] → 「放火犯がつかまった」	真実이 NOM 檢察에 依해서 [に依って] 밝혀졌다[balkhyeo jyeotda: balkhi 明らかにする 語幹+linker +jida 過去] → 「真実が検察によって明らかになった/された」
③尊敬	先生が黒板に本を書かれた。			★韓国語では, 尊敬の形式が別に存在している。
④動作主側の能力や状況可能	(私のPCでは) この添付ファイル {が/を} あげられない。			★別の可能形式が対応 <sup>10</sup> 첨부파일[添付 file]을 ACC {열 수 없다/못 열어} (添付ファイルがあげられない)
⑤自発ベースの事態日実現[可能の否定]		(この教室は)Wi-Fi がつながらない	Wi-Fi 가 NOM 안 NEG 잡혀 [jap hy eo: jap つかむ 語幹+hi 被動接辞+linker 現在] → 「Wi-Fi がつながらない」	문[扉]이 NOM 안 NEG 열어져 [yeor eo jyeo:yeol 開ける 語幹+ji[jida] 語幹+linker 現在] → 「扉が開かない」
⑥自発ベースの事態実現[可能の場合]		(この教室は)Wi-Fi がよくつながる	Wi-Fi 가 NOM 잘 [よく] ADV 잡혀 [jap hy eo: jap つかむ 語幹+hi 被動接辞+linker 現在] → 「Wi-Fi がよくつながる」	詩가 NOM 술술 ADV [すらすら] 쓰여진다 [sseueyo jinda: sseu 書く 語幹+hi 被動接辞+jida 現在] → 「詩がすらすら書ける」
⑦状態変化(形容詞類に接続)	形容詞は通常「~{</>}になる」構文を用いる	(お茶を飲んで)体があたたまった。	×形容詞+i 系統→他動詞となる。Ahn&Foong (2017) 例: 넓히다[neolphida:neolp 広い 語幹+hi 使動接辞] → 「広げる」	몸[体]이 NOM 다따뜻해졌다 [ttatteuthaejyeotda: ttatteutha 暖かい 語幹+linker +jida 過去] → 「体があたたまった」

<sup>4</sup> 有対自動詞でも接辞「-jida」でも可能の意味が出ることについて, Ahn&Foong (2017) では, 可能の意味が後発で主観化によるものという。可能用法が中相であるとの見方から副詞(잘[jal:よく]等)や副詞節の存在を強調しているが, 渋谷(2006)等で指摘されている日本語の自発系可能表現では動作主(または話し手)の事態表現に対する「期待」の有無が可能の意味表出と関係していることが韓国語にも当てはまると考えられる。

<sup>5</sup> 尚, 日韓の有対自動詞が表1のような意味を担うのは, ここで扱うタイプ(日本語-aru系や韓国語-i系)に限らない。

<sup>6</sup> 「-jida」と「自発」接辞を有する日本語方言との比較は既にある。表1は北海道方言ララルと「-jida」を対照させた円山(2016)を参考にした。

<sup>7</sup> 「-aru」による自動詞形成の詳細に関しては, 小池(2019)を参照した。

<sup>8</sup> 影山(1996)では, 表1の「つかまる」のように, 動作主を要求する他動詞の自動詞化(例: 助ける→助かる)は, 英語のようなゼロ形態による自他交替が起きる言語では通常見られないが, 日本語では「-aru」による自動詞が形成されることに注目し, 反使役に対して脱使役と名付けている。

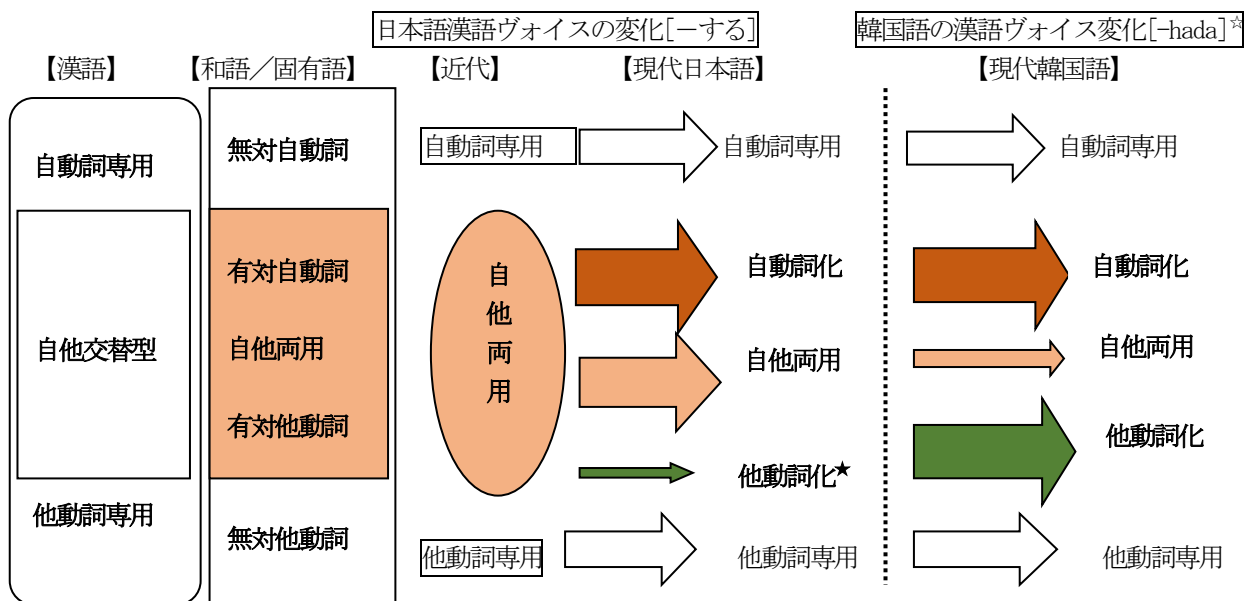
<sup>9</sup> Ahn&Foong (2017) の韓国語歴史コーパス(UNICONC)を用いた通時的研究によれば, これらの「被動」「使動」共有の接辞(-i, -hi, -ri, -ki)は, CAUSATIVE > (CAUSATIVE REFLEXIVE) > SPONTANEOUS MIDDLE > PASSIVE > FACILITATIVE という経過を経て, 重層的な意味を有するようになり, SPONTANEOUS MIDDLE 以降の文法化に関しては意味的に隣接する「-jida」と影響関係を持ちながら現在の用法に至ったと考えられる。

<sup>10</sup> 韓国語では動作主の会得した能力を表す形式「을 줄 {알다/모르다} eur jur {alda/moreuda}」, 能力・状況・心情可能の否定「못mot」, 潜在的可能と蓋然性を表す形式「을 수 {있다/없다} eur su {itda/eoptda}」が存在し, 自発系の可能表現とは棲み分けが見られる(高2015)

### 3. 日本語の漢語動詞接辞に「-なる」はないが、韓国語には「-doeda (되다)」がある。

第3節では、現代日本語のヴォイスが非対称的であることを如実に見せてくれる現象として、漢語動詞のヴォイス接辞における日韓のズレを紹介する。韓国語母語話者の「\*戦後日本経済は発展された」のような誤用は、長年日韓対照研究で論じられてきた（生越 1982, 田窪 1987 等）が、金谷（2018）では、永澤（2007）の通時的研究にヒントを得て、現代日本語の漢語動詞に自動化接辞がなかったことが日韓のズレの原因であることを指摘した。永澤（2007）は、近代には自他両用の漢語動詞が多かったことに着目し「-する」接続時の漢語動詞の自他の変遷を調査した。その結果、①近代で自動詞専用（移住する・行動する・死亡する等）は現代でも自動詞専用のまま、②近代で他動詞専用（印刷する・準備する・排除する等）は現代でも他動詞専用のまま、③近代で自他両用だったもの（自他交替型の語幹）に関しては、自動詞専用化したもの（破裂する・発展する・減少する等）と自他両用のまま留まったもの（移転する・実現する・閉鎖する等）に分かれた。永澤（2007）によれば、③に見られる現象は、漢語動詞が日本語への定着度を増すなかで、和語に倣い自他を分化させる方向へ力が働いたため起きた現象であり、この「自動詞専用化の流れ」を可能にしたのが他動化接辞として機能する「-させる」の存在である。「-する」で自動詞専用化しても、「-させる」を用いて同じ語幹を他動詞としても使用できるため不都合はない（例：vi. 発展する/vt. 発展させる）。しかし、ある語幹が「-する」接続で他動詞専用化してしまうと、同一語幹を自動詞として使用するための接辞がなくなるという不都合が生じる。「-される」はあくまで人為的な外部の力を背景にする受動化接辞であるからである（例：停止される≠止められる≠止まる→「停止する」は自他両用にとどまっている）。

一方、近代化の時期に日本語との接触により多くの共通の漢語動詞を使用するようになった韓国語では、同時期に自他の分化が進行したとみられるが、韓国語の場合、③にあたる自他交替型の語幹において、漢語用言のデフォルト接辞「-hada (하다)」で自動詞専用化が進んだもの（変化・発展・減少）と、他動詞専用化が進んだもの（実現・拡大・移転）の両方が観察された。韓国語では、図1に見られるように、自他交替型の語幹のうち、自動詞化するものと他動詞化するものが双方向に分化したのである。それを可能にしたのが、「-させる」と似た「-sikida (시키다)」と、日本語にはない自動化接辞「-doeda (되다)」であると考えられる。「-doeda (되다)」は本動詞では「なる」の意味に近く、漢語接辞として自動化接辞の役割を担った。日本語でも「-なる」が自動化接辞として採用されていれば、漢語動詞の自他の分化が双方向に対称的になった可能性がある。興味深いことに、山形市方言では、漢語語幹に直接「-なる」を接続させるという現象がみられ、「-なる」が自動化接辞として機能していることを須賀（2015）が報告している。須賀（2015）が挙げている「漢語+なる」の36例は、そのほとんどが韓国語の「-doeda」に翻訳可能である。自他交替型のうち、日韓で自動詞化が進む語幹「減少」も韓国語では他動詞化が進む「実現」も「-doeda/なる」の接続で自動詞となり、もともと他動詞用法しかない「設置」「採用」は、「-doeda/なる」が接続すると受身として解釈される。このような現象が山形市方言で見られるのは、生産的な「自発」接辞を持ち（渋谷 2006）、ヴォイス体系の中に「自発」領域を維持しているからではないかと推測される。



★自他両用から他動詞化意味の特殊化したもののみ（例：変更, 隔離, 短縮）

☆韓国語の交替型の漢語動詞は、現在「-hada」ではなく、「-doeda」で自動詞、「-sikida」で他動詞が定着しつつある。

図1 永澤（2007）を発表者が図式化したもの（左）に韓国語漢語動詞ヴォイスの現在の状況（右）を対照させたもの

#### 4. まとめ：「使役余剰」は韓国語にもあるが、韓国語の「二重被動（二重自発）」は日本語にはない。

定延 (2000) では「はっきりしろ/させろ」のような「する」でも「させる」でも項体制が変わらない文について論じ、このような現象を「使役余剰」と名付けた。第3節でも見たように、「させる」は「人が人に何かをさせる」という“典型的な”使役文を作る接辞というよりも、他動化接辞としての役割が寧ろ中心的である (森 2012)。使役主が動作主とは別に存在するという条件が整ったときにだけ使役と解釈されるのである。「使役余剰」は韓国語にも見られる。図1の自他交替型語幹の漢語接辞は「-hada」よりも「-sikida」で他動化するのを自然だと感じる母語話者が増えており、辞書の記載とのズレが目立つ。ところが、韓国国立国語院は市民からの質問に対して、「-hada」で十分であるのに使動接辞「-sikida」を使用するべきではないと回答しており、このような「-sikida」の使用は余剰だと考えているようである (例：「癌을 ACC × 誘発 sikida → ○ 誘発 hada」)。日本語と異なるのは、韓国語には「使役余剰」だけでなく、「二重被動」と呼ばれる現象があることである (例：right to be forgotten 訳語「잊혀질 권리[権利]：잊[忘れる]<sub>語幹</sub>+hi (被動接辞)+질 jida<sub>ADN</sub>)。韓国語学では、有対自動詞語彙や「-doeda」が存在する用言にさらに「-jida」を接続させることを「二重被動」と呼び、韓国国立国語院はこれについても、「使役余剰」以上に「好ましくない」という立場<sup>11</sup>を発信しているが、そもそも「-jida」の中心的意味は「自発」であり、前項動詞 (または語幹) の意味によって自発的事態実現、状態変化、可能、受身まで多義であることから、実質的には「二重被動」ではないものがほとんどである。翻って、「受動/能動」の対立が目立つ標準日本語には、「縮む/縮まる」のような語彙的な「二重被動」はあっても、生産的な「二重被動」は存在しない<sup>12</sup>。韓国語は日本語が失いつつある「自発」領域をヴォイス体系にしっかりと持つ「自発/能動」対立型言語であり、おおいにこれらの自発形式を多用する言語内的な理由を持つと考えられる。日本語/韓国語の語学教育関係でよく耳にする「韓国語は日本語より能動的であり、日本語は韓国語よりナル的言語である」というような「常識」も見直されるべきだろう。

以上、「受動」と「自発」、「他動」と「使役」がそれぞれ未分化であり、双方向に対称的なヴォイス体系を持つ韓国語に比べると、「自発」がもはや生産的でなくなり、「受動」や「可能」が分化した日本語のヴォイス体系は非対称的に見えることを論じた。

#### 「参考文献」

- Ahn, Mikyung and Foong Ha Yap (2017) From middle to passive A diachronic analysis of Korean *-eci* constructions. *Diachronica* 34:4, 437-469.
- 鄭聖汝 (2004) 「韓国語の自動詞とヴォイス—自発と受身の連続性—」 影山太郎・岸本秀樹 (編) 『日本語の分析と言語類型：柴谷方良教授還暦記念論文集』 319-335.
- 早津恵美子 (1987) 「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」 『言語学研究』 6, 79-109.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点』 くろしお出版
- 金谷由美子 (2018) 「漢語サ変動詞のボイスに関する一考察—自他交替型と無交替型に分ける試み—」 日本語/日本語教育研究会 (編) 『日本語/日本語教育研究』 9, ココ出版, 135-150.
- 韓国国立国語院 「Online GANADA 온라인가나다」 (2019/12/20 最終閲覧)
- 高恩淑 (2015) 『日本語と韓国語における可能表現』 ココ出版
- 小池康 (2019) 「類型性から見た有対他動詞の研究—終止形活用語尾[-aru]自動詞と[-eru]他動詞を中心に」 大阪大学言語文化研究科・日本語日本文化専攻 (編) 『日本語日本文化研究』 29. (近刊)
- 円山拓子 (2016) 『韓国語 cita と北海道方言ラサルと日本語ラレルの研究』 ひつじ書房
- 森篤嗣 (2012) 「使役における体系と現実の言語使用—日本語教育文法の視点から」 『日本語文法』 12(1), 3-19.
- 永澤濟 (2007) 「漢語動詞の自他体系の近代から現代への変化」 『日本語の研究』 第3巻4号, 17-31.
- 野田尚史 (1990) 「日本語の受動化と使役化の対称性」 筑波大学文藝・言語学系 (編) 『文芸言語研究 言語篇』 19, 31-51.
- 生越直樹 (1982) 「日本語漢語動詞における能動と受動」 『日本語教育』 48 : 53-65. 日本語教育学会
- 定延利之 (2000) 『認知言語論』 大修館書店
- 柴谷方良 (2000) 「第3章 ヴォイス」 仁田義雄・益岡隆志編 『文の骨格』 岩波書店, 117-186.
- 渋谷勝己 (2006) 「第2章 自発・可能」 『シリーズ方言学2 方言の文法』 岩波書店, 47-92.
- 須賀一好 (2015) 「形式動詞としての〈なる〉—山形市での漢語動詞の用例観察から」 『金沢大学国語国文』 40, 1-8.
- 田窪行則 (1987) 「誤用分析5」 『日本語学』 6: 8, 133-138, 明治書院

<sup>11</sup> 「二重被動」は受動文の多い日本語や欧文翻訳調の影響であるとされ、国立国語院が掲げる「国語純化」からみても不適切であるためかと思われる。

<sup>12</sup> 「この字、読め(ら)れません」のような所謂「レ足す」ことは「使役余剰」とは異なり、一般的に非文とみなされる。